

上市町埋蔵文化財分布調査報告Ⅳ

1991年度

上 市 町 教 育 委 員 会

1992年3月

序

靈峰剣の麓に広がる上市町は、古くから人々の生活の場として、数多くの文化遺産を育みそだててきた所です。旧石器時代の眼目新丸山遺跡、縄文時代の極楽寺遺跡をはじめとする多くの遺跡、弥生時代の江上遺跡などが、その歴史を如実に物語っています。祖先が苦難に耐えて、人生を開拓し、懸命に生きてきた中に、激変する今日にも通用し、来るべき21世紀にも価値を持つ「生き方の哲学」を学ぶことができるのです。

ところが、近年、押し寄せる開発の波の中でこれらの貴重な文化遺産が失われようとしています。

町ではこの事態を重視し、次代を背負う人々にこの文化遺産を継承することが、今に生きるもの責務であるとの考え方から、そのための基礎資料を充実することにいたしました。

本書がより多くの方々に利用され文化財保護の一助となることを願ってやみません。

最後に、調査の実施、報告書の作成にあたり、御協力いただいた地元の方々、また御援助をいただいた富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター、富山大学人文学部考古学研究室をはじめとする関係機関の方々に厚く御礼申し上げます。

例　　言

1. 本書は上市町教育委員会が国庫補助事業として実施した遺跡詳細分布調査の4年次目（1991年度）の報告書である。
2. 調査は、富山県埋蔵文化財センター、富山大学考古学研究室の指導と協力を得て上市町教育委員会が実施した。
3. 調査事務・現地調査は、生涯学習課主任高慶孝が担当し、生涯学習課長荒川武夫が総括した。
4. 遺物の整理、本書の編集・執筆は、調査担当者が行った。
5. 調査参加者は次のとおり。
(現地調査補助員) 高橋浩二・谷杉延子・河合君近・角田隆志・片岡英子・鈴木和子・森田知香子・浜木さおり・宮沢京子・中村大介・小野木学・長谷川幸志・柳原滋高・宮田明・大野淳也・松山温代・柳沼弥生・松田留美・大知正枝・海道順子・島崎久恵(遺物整理) 中村芳子
6. 本書の作成にあたっては、富山県埋蔵文化財センターをはじめ、富山大学人文学部助教授、宇野隆夫・同講師、前川 要の両氏、富山県埋蔵文化財センター文化財保護主任狩野睦・橋本正春の両氏、立山町教育委員会社会教育課主事森秀典・同嘱託 濱戸智子の両氏をはじめとする方々から多大の御協力と、貴重な御教示をいただいた。深く感謝して御礼申し上げる次第である。

目 次

第1章 はじめに

1 調査の目的.....	1
2 調査の経過.....	1
3 上市町の地勢と自然.....	2

第2章 分布調査の成果..... 3

1 遺跡と採集遺物.....	3
(1)郷田背跡.....	3
(2)中山王古墳跡群.....	3
(3)弓庄城跡.....	3
(4)神田遺跡.....	4
(5)稗田 A 遺跡.....	5
(6)稗田 B 遺跡.....	5
(7)稗田 C 遺跡.....	6
(8)その他.....	6
イー 1 地区.....	7
イー 2 地区.....	7
ロー 1 地区.....	7
ロー 2 地区.....	7
ハーハー 1 地区.....	7
ハーハー 2 地区.....	7
ニ　　地区.....	7
参考文献.....	8

挿 図 第1図 地域区分図.....	2
--------------------	---

図版目次

- 図版1 調査地区現況写真 (1)
- 図版2 遺物実測図 (1) 土師器、須恵器、陶磁器
- 図版3 ◊ (2) 土師器、須恵器、陶磁器
- 図版4 ◊ (3) 土師器、須恵器、陶器
- 図版5 ◊ (4) 須恵器、陶器
- 図版6 ◊ (5) 須恵器、珠洲焼、陶器
- 図版7 ◊ (6) 須恵器、珠洲焼、陶器
- 図版8 ◊ (7) 土師器、須恵器、陶器
- 図版9 ◊ (8) 須恵器、石器、陶磁器
- 図版10 遺物写真 (1) (2) 土師器、須恵器、陶磁器
- 図版11 ◊ (3) (4) 土師器、須恵器、陶磁器
- 図版12 ◊ (4) (5) 須恵器、珠洲焼、陶器
- 図版13 ◊ (6) (7) 土師器、須恵器、珠洲焼、陶器
- 図版14 ◊ (8) 須恵器、石器、陶磁器
- 図版15 遺跡分布図

第1章 はじめに

1 調査の目的

上市町に人々の営みが確認できる最も古い時期は、今から約1万8千年前であり、それは上市川左岸の河岸段丘、^{アカシカシカヒラカタ}「眼目新丸山遺跡」においてである。以後、旧石器（先土器）・縄文時代は、この上市川左右両岸の段丘上、弥生時代は、上市川、白岩川をはじめとする河川により形成された扇状地、古墳時代以降は町の平野全域というように、時代により生活の場の中心は変化する。しかしながら、人々の営みは現在に至るまで継続として続いている。

したがって遺跡の数も多く、1972年（昭和47年）の「富山県遺跡地図」においては41箇所の遺跡が登録されている。そして、弥生時代の江上遺跡に代表されるように、その後、新たに発見された遺跡も多く、未発見、未登録の遺跡も少なからず存在するものと考えられる。

ところが近年の開発行為の増加に伴い、遺跡の保護と開発との調整が社会問題化してきており、こうした中で、人知れぬうちに消滅した遺跡もあった可能性がある。

このような中にあって、上市町教育委員会は、郷土の歴史と文化を守り育てるために、また保護と開発との調整のための基礎資料として、遺跡台帳、遺跡地図の整備充実が急務であると考えたのである。

2 調査の経過

以上から上市町教育委員会では、国庫補助金、並びに県費補助金を得て遺跡詳細分布調査を行うことにした。今回の調査はその4年次目に当たる。

調査対象は、山岳地帯と一部山地を除く全町域をI～V地区に区分し、5箇年を目途に遺跡の所在確認及び遺物の採集を行うこととした。

今回の調査地区は、町の南東から北西に流れる大岩川、白岩川の流域部分（柿沢・弓庄地区）及び旧上市川の氾らん原（上市地区西部）である（第1図）。これらの地区は、工場誘致や、道路の新設、拡幅などが立案されている地区であり、遺跡の保護上、早急に遺跡の有無、規模、性格を把握する必要があった。調査の実施にあたっては、便宜上、大岩川と白岩川に挟まれた地区と白岩川の西側の地区、白岩川、大岩川の北部に当たる地区的3地区に区分し、さらに各地区を村落や水田、道路等により数箇所の小地域に分けて、対象地域の目安とした。ただし、南東に広がる山間部は、山が深く、分け入ることが困難であったため、調査は将来に委ねた。調査地域は約350haである。

調査に持参する地図は5千分の1の国土基本図とし、遺物の密度の高い場所以外では、原則として1点ごとに地点を記入した。

調査期間は、1991年11月7日から同年11月21日の計8日間、延95人の参加を得て実施した。遺物の調査、実測、写真撮影、報告書の作成は1992年1月から3月にかけて行った。

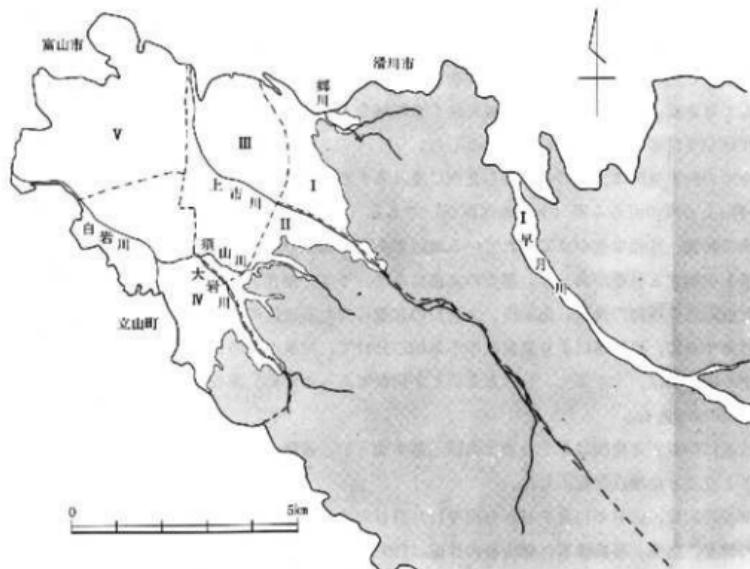
調査にあたっては、富山大学考古学研究室の協力を得、現地調査の補助員として多くの方々に参加いただいた。記して謝意としたい。

3 上市町の地勢と自然

上市町は、富山県の東南部に位置し、立山連峰に源を発する早月川、上市川、白岩川にそって東南から北西に延びる町である。西は県都、富山市に東は標高2998mの御岳をはじめとする北アルプスの山々が連なる。町域は東西約26km、南北約16kmで、面積は約237km²である。

地形は実に変化に富んでいる。東部は山岳地帯で、そこをぬうように早月川が流れしており、流域に独自の自然景観をあたえている。西部は、上市川、白岩川によって形成された扇状地が広がり、緑の田園地帯を形づくっている。富山湾岸までの距離は約10kmである。扇状地の扇端部は、隆起によってできた河岸段丘が東西に延び、山地との境にまで続く。こうした地形の背後に丘陵があり、御岳をはじめとする北アルプスの山々が連なる。町の最高地点御岳と最低位の上市川扇端部までは約26kmで、比高差は約2,950mである。

今回の調査は、白岩川、大岩川の流域、及び上市川の旧氾濫原である。これらの地域は古代から中世にかけての遺跡が知られており、河川を介した水運もあった地域である。



第1図 地域区分図（IV地区が1991年度）

第2章 分布調査の成果

1991年度調査によって整理箱3箱分の資料を採集した。遺物の総数は、687片で、約60個体余りの土器などを採集した。以下遺跡ごとに説明を行う。

1 遺跡と採集遺物 (図版1~15)

(1) かきぐれ 蜂田砦跡 (図版15の1) 上市町柿沢字郷田

郷田砦は、大岩河の左岸、標高100mの樹形山の山頂部に所在する。ここは麓から30m余りの比高差しかない丘で、それほど険しい地形ではないが、白岩川沿いから大岩に向かう道筋の入り口であり、西側に広がる弓庄城とは直線で約600mの要地で、城内全体を見渡せる位置にある。

山頂部の主郭と思われる部分は10m×22mの削平地で、南側と東側に土塁がめぐり、山続きの南側は尾根を切断して掘切がもうけてある。この主郭の北と西側にも一段下って、小さな郭ももうけられている。主郭の西側(弓庄城側)は、土塁がなく、むしろ人工的に斜面を削り出している。

この砦は、天正11年(1583年)に佐々成政が、麓の弓庄城(城主は土肥政繁)を城攻めした際の砦といわれているが、諸説あり、初めは土肥氏の出城であったものを佐々成政が城攻めのとき、逆に向城として利用したものと考えられている[1980 高岡]。江戸時代の初め頃に記された『土肥家記』(有沢永貞著、金沢市立図書館蔵の付図「弓庄古城之図」の中にも樹形山が記されており、「佐々成政、付城ノ跡」と添え書きされている。今回の調査では遺物は採集されなかったが、以上から16世紀頃の築城と考えられる。

(2) なやさん 中山王古窯跡群 (図版15の2) 上市町柿沢字中山王

窯跡群は、樹形山の南側の麓、弓庄城跡の東側約300mに位置する。地形は、樹形山から南に向かって伸びる山地の山麓部である。標高は67mから85mで、西側を北流する白岩川右岸の段丘からの比高差は約30mで比較的急な斜面上に立地している。

窯跡は炭焼窯が23基、須恵器窯跡が3基これまで確認されているが、このうちの1基は瓦陶兼業窯である。炭焼窯は標高67mから70mの多少緩斜面に築かれているが、須恵器窯は70mから85mの急な斜面を利用して作られている。

この遺跡は、農業用水路の整備工事の際、昭和57年と58年に調査が行われており、多数の須恵器片を出土している。その出土遺物からみて窯跡は6世紀末から8世紀初頭の約100年間、断続的に操業されたものと推定されている。

(3) ゆき 弓庄城跡 (図版15の3) 上市町館

城跡は樹形山の西側約600mの白岩川によって形成された河岸段丘上にある。標高は40~60mで、比較的低いが、新川平野から富山湾まで一望することができる。城は東側を山地に、西側を白岩

川に挟まれた南北に延びる段丘に沿って構築されている。

城の規模は、江戸時代に描かれた「弓之庄古城之図」と現在の水田の地形、及び昭和55年から昭和59年の5箇年に亘り行われた発掘調査の結果から、南北約600m、東西約150mの巨大な城であったと推定される。城の縄張りは、本丸を段丘の最上位に配し、そこから北に向かって二の丸、三の丸を配する「連郭式縄張り」の城である。

この城は、正平年間（南北朝期）から室町時代を通じて中新川一帯を領した土肥氏の居城で、16世紀初頭に築かれたものと考えられる。天正10年（1582）から約1年に及ぶ佐々成政との攻防の末、翌天正11年に開城、その後、廃城となつたらしい。

5箇年にわたる発掘調査では、城跡をめぐる堀や濠・土塁・橋跡などの防御施設、井戸・建物・溝・土括などを検出している。遺物は、瀬戸、美濃、越中瀬戸、珠洲、越前、伊万里などの陶磁器類、土師質土器、中国製磁器などの他、かんざし・おうがい・クシといった装飾品、下駄・梳・箸といった木製品など中世の生活用品が一括して出土し、注目された。

発掘調査では、この他に13世紀頃の遺構・遺物も検出されており、この地が城の築城前から庄園内の村落などが存在していたことをうかがわせている。

現在、城跡全体は、本丸跡の約2万m²を残して、は場整備された水田下に埋もれており、今回の分布調査では遺物を採集していない。

(4) 神田遺跡（図版15の4）上市町神田

遺跡は白岩川と橋津川に挟まれた地域で、県道柿沢・泉線と、北陸自動車道が立体交差する付近に所在する。標高は13mから15mの低地で、いわゆる沖積平野の遺跡である。

遺跡は、北陸自動車道の建設の際に発見され、昭和54年に発掘調査が行われている。この調査で掘立柱建物・橋・井戸・溝・穴など中世に属する遺構が検出されている。この建物群は、三棟程度が、6期に亘って、一定の地割に従って配置されたものと考えられており、公的性格の強い建物群と考えられている〔1981 橋本正寿〕。

出土遺物は、奈良・平安期の須恵器、中世の珠洲、土師質土器、磁器、石器、近世に属する瀬戸などが出土している。

今回の調査では、遺跡地内での遺物の採集はできなかったが、周辺のロ-2地区からの出土遺物13点を図示した（図版3の30~32、4の6、6の17・20・27、8の3・12・14、9の13・15・19）。

図版3は、いずれも須恵器である。30は小型の壺である。31は内外面に押圧痕、打圧痕が残る外側は1cm当たり4条ぐらいの木目に斜交する刻み目を入れた打圧原体が使用されている。押圧原体は同心円文である。奈良時代のものと考える。図版4の6は、高杯の脚部に埋め込まれたもので土師質である。図版6の17・20は須恵器、27は越中瀬戸の皿である。このうち20は長頸壺の頸部で2条の沈線がめぐる。図版8の3・14はそれぞれ越中瀬戸の碗と花瓶の底部である。12は土師質の小皿で中世のものであろう。図版9の13・15・19はいずれも越中瀬戸である。採集された遺物のうち須恵器は、いずれも奈良時代のものと考えられ、神田遺跡の出土遺物と関連があ

るものと思われる。また本地区は、柄津川をはさんで対岸に立山町若宮遺跡があり、両遺跡の関連も今後の課題となろう。

(5) 稲田 A 遺跡 (図版15の5) 上市町稲田

遺跡は稲田地区のはば中央、稲田神社の北約50mの水田に所在する。標高は約33mを測る地域で、一帯は宅地と水田である。ここでは、奈良時代から平安時代にかけての遺物が多く、水田1枚に集中している。

遺物は須恵器89点、珠氈2点、陶磁器5点を採集した (図版2の1~21・23~32、図版3の1~9)。以下図版ごとに記述する。

図版は2の1~16・20・23~28・30~32は須恵器である。

1は口径約36cmのやや大きめの壺の口唇部である。

2~11は、杯蓋類である。2~4・8・11は平笠形を呈し、端部がやや内屈する。7は、凝宝珠のつまみで前述の蓋類に付くものと考える。6は頂部から端部へなだらかに移行するタイプで笠形を呈する。端部をはり出して受け部が作られている。5・9は頂部が平らで、端部が直立ぎみに立つものである。短頸壺の蓋と考えられる。10は、頂部が平らで、つまみを有さない平笠形の蓋である。

12~16は杯身・碗類である。12~15は口縁部で、口縁部が薄く、体部から口唇部にかけて外反ぎみとなるものである。16は、体部と底部との境が腰をなし、体部への立ち上がりも直線的である。

23~28・30~32は壺・碗類の破片である。23~26・31・32は外面に平行叩きを施したものである。27・28は外面に平行叩き、内面には完孤をなさない弧状の原体を持つ押圧痕が残る。30は内面に同心円状の押圧痕を有する。

17~22は陶器である。17~20は越中瀬戸である。17・18は鉄釉の碗、19は小型の壺、20は偏平な底面の皿である。21・20は瀬戸・美濃系の陶器である。21は灰釉が施された鉢で外面に貫入が見られる。22はやや大きめの壺で口縁にかえしが施されている。

図版3の1~3・7は土師器である。1は口唇部が肥厚して内湾する壺で、端部に沈線がめぐる。2は口縁が外反して肥厚する。3は、口縁が外反する壺である。7は皿で口縁が肥厚する。

4~6・9は須恵器である。4~6は外面に平行叩きを施した後、搔目調整が行われている。

9は、やや日の細い木目の原体を矢がすり状に使用している。

以上から、出土遺物の示す遺跡の時代はやや幅があるが、大むね8世紀末から9世紀中頃にピークがあるものと考えられる。

(6) 稲田 B 遺跡 (図版15の6) 上市町稲田

遺跡は、稲田 A 遺跡の南側約50mに隣接する稲田神社の背後の水田、畑に所在する。標高は約32mで、A 遺跡との標高差はほとんどない。ここでも奈良・平安時代の遺物が数多く採集された。

遺物は、須恵器47点、越中瀬戸6点を採集したが、そのうちの18点を図示した (図版3の10~

17)。

10・12~18はいずれも須恵器である。

10・12・14・16・17は壺・甕類の破片である。10・14・17は平行叩きが外面に施されている。又、17は押圧痕がすり消されている。12は外面が細格子の叩で、内面は完孤をなさない押圧原体が用いられている。16は鉢の口縁部である。

13・15は杯身・甕類である。13は口縁が肥厚し、やや外反する。15は口縁が丸く立ち上がるものである。

11は越中瀬戸の小型の壺である。内外面に鉄釉が施され、口縁が外反するものである。

以上から稗田B遺跡は、稗田A遺跡とくらべ採集される遺物がやや後出的なタイプのものが多く、10世紀ぐらいまで年代が下る可能性が強い。

(7) 稗田C遺跡 (図版15の7) 上市町稗田

遺跡は、稗田B遺跡の南側にはば隣接する形で存在する。県道道源寺・上市線と東川の町道、稗田・石原線に挟まれた南北100m、東西250mの地域に所在する。標高は約31mを測り、稗田A・B両遺跡よりやや低地に位置する。周辺は、水田と宅地である。

遺物は、須恵器92点、陶磁器7点で、採集できた遺物のはほとんどが須恵器であった。このうち10点を図示した (図版4の21~30)。

21・22・24~30は須恵器である。

21・22・24・25は、壺・甕類の破片である。21・22・24は外面に平行叩きが施されているが、22はその後、搔き目がほどこされている。内面は同心円の押圧痕を残している。24は内面に完孤をなさない押圧原体が見られる。24は、平行叩きの後、ていねいな搔き目が施されている。内面は完孤をなさない押圧具痕が施されている。

26・30は、杯蓋である。26は邊部が内屈ぎみで、周間に沈線が見られる。30は平笠形を呈するもので、端部はやはり内屈ぎみである。

27・28・29は、杯身である。このうち27・28は底部で、高台がいずれも低く、底部から体部へ丸く立ち上るもので、かなり後出的な特徴を有する。10世紀末まで下るものと考える。29は、口縁部である。薄手で口唇部が外反するものである。

以上であるが、稗田C遺跡は、稗田B遺跡とは同時期か、やや新しい時期の遺跡と考えられる。

(8) その他 (図版15)

今回の調査で、遺跡として設定した地区以外でも多くの遺物を採集した。以下各地区ごとに採集した遺物について述べてみたい。

イー1地区 白岩川と大岩川に挟まれた地区で、広域農道(スーパー農道)以南に設定した地区である。この地区での採集遺物は中世のものが多く、珠洲・瀬戸・美濃などが所々で採集され

る（図版6の12・16・33・38、図版7の1、図版8の10・16・24）。これは、弓庄城跡をはじめとする中世の遺跡が周辺に存在することによると考えられる。

図版6の33・38、図版7の1はいずれも珠洲の擂鉢である。7の1は珠洲編年〔1981a古岡〕のⅠ期に当たるものであろう。

図版8の10・16・24は越中瀬戸である。10は茶軸が施された碗である。16は灰軸の花瓶底部である。24は小型の壺で外面に鉄軸が施されている。

イー2地区 大岩川が白岩川に合流する地点の以南でスーパー農道以北に設定した地区である。採集遺物は少量である（図版5の29、6の5、8の6・19、9の17）。このうち5の29は弥生式土器の底部であり、注目される。

ロー1地区 白岩川の左岸で、主要地方道、魚津・立山線の東側の地区である。採集遺物はそれほど多くないが、縄文土器が採集されるなど、注目される（図版6の11・31・32・39、9の14）。

また採集品ではないが、地元の方より提供を受けた石器及び須恵器の杯身は、周辺に大きな遺跡の存在を感じさせる資料である（図版9の29・30）。このうち29は蛇紋岩製のスリ切り石斧の未成品である。スリ切り痕が從方向と側面方向に見られ、大きな母石から板状の石材をとり出し、それをさらにスリ切って製作しようとしたものようである。30は端部が丸くおさまる杯身である。

ロー2地区 白岩川の左岸で、主要地方道、魚津・立山線の西側の地区である。この出土遺物は神田遺跡の周辺遺物として前述した。

ハーネ1地区 白岩川右岸で、主要地方道、魚津・立山線の以西、町道、正印新・北島南線以北の地域である。ここで採集された遺物は近世陶磁器ばかりであった（図版6の6・14・15・30、8の8・9・15・20・23・25、9の1～3・10～12・18）。この地域は、近世以前は、上市川の流路であり、近世以降、河川改修により開かれた地区で、この結果はそれを後づけることとなった。

ハーネ2地区 町道、鎌町・館線以西の地区で、今回調査した地区的うち最も多量の遺物を採集した地区である。採集した遺物のほとんどが、奈良・平安時代のものと思われる須恵器や土師器であった（図版2の22、3の21・23～29、4の1～5・7～20、5の1～4・13・16～20・22～26・28・30～34、6の1～4・7・8・35・36・40、7の2～28、8の1・2・4・7・11・17・21・26・29～37、9の4・5・7～9・21・22・24・25・28）。前述した稗田A・B・Cの各遺跡もこの地区で発見された。この地域は標高30～36mの地域で平野部でも若干の高台であり、旧上市川の左岸に位置する。昨年の調査で発見された稗田善界遺跡・稗田大門添遺跡に続く地域で一連のつながりを持っているようである。

ニ地区 町道、正印新・北島南線と、主要地方道、富山・上市線に挟まれた地区である。出土する遺物はほとんどが近世で、ハーネ1地区同様、旧上市川の流路であった地域である（図版5の5～12・14・15・27・35、図版6の9・10・13・18・19・21～26・28・29・34・37、8の5・13・18・27・28、9の6・16・20・23・26・27）。

以上であるが、今までの調査で、旧上市川の流路の左岸地域に、奈良・平安時代の遺跡が連続して存在することが明らかとなった。これらは地域差、時代差があるが途切れることなく、上市成立の重要な基点となるものと考える。これに対して旧上市川の右岸地域は明確でなく川の流路とともに今後調査を進める必要があるものと考える。

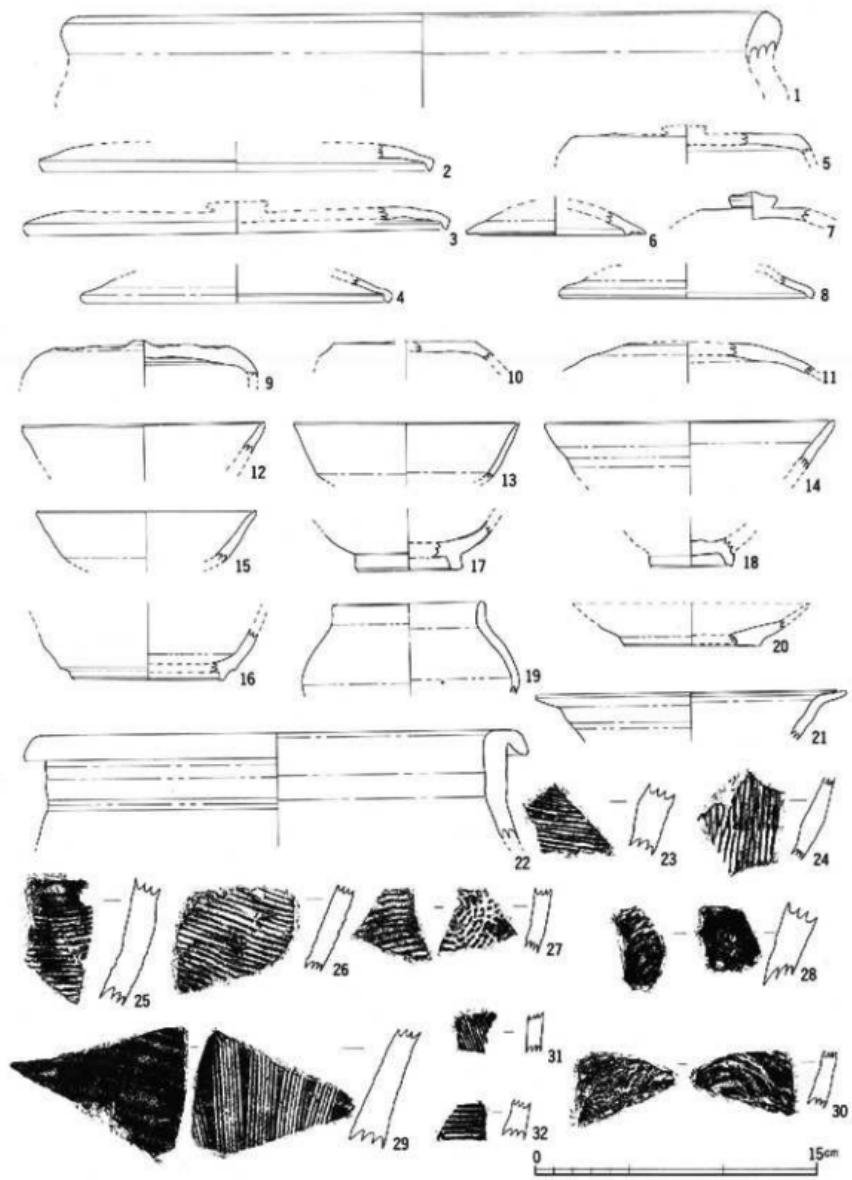
参考文献

- 1 上市町『上市町誌』1970年。
- 2 上市町教育委員会『弓庄城跡第4次緊急発掘調査概要』1984年。
- 3 上市町教育委員会『弓庄城跡第5次緊急発掘調査概要』1985年
- 4 上市町教育委員会『神田遺跡』『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町遺構編』1981年。
- 5 上市町教育委員会『上市町埋蔵文化財分布調査報告I』1990年。
- 6 上市町教育委員会『上市町埋蔵文化財分布調査調査報告II』1991年。
- 7 上市町教育委員会『上市町埋蔵文化財分布調査報告III』1992年。
- 8 高岡徹「富山県」「日本城郭体系」7新人物往来社 1980年。
- 9 高岡徹「富山県上市町柿沢城と国人士肥氏の城館配置」「かんとりい」NO.6 越中の歴史と文化を考える会 1982年。
- 10 立山町教育委員会『立山町史』上巻 1977年。
- 11 立山町教育委員会『立山町埋蔵文化財分布調査報告II』1987年。
- 12 富山大学考古学研究室『越中上末窯』考古学研究報告第3冊 1989年。
- 13 富山県『富山県史』考古編 1972年。
- 14 富山県教育委員会『富山県遺跡地図』1972年。
- 15 藤田富士夫『富山』、日本の古代遺跡13 保育社 1983年。
- 16 森秀雄『大昔の富山県』1950年。
- 17 吉岡康暢『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会 石川考古学研究会1983年。
- 18 吉岡康暢『加賀・珠洲』世界陶磁全集3、日本中世 1977年。
- 19 吉岡康暢『中世陶器の生産と流通』考古学研究108号 1981年。

図版一 調査地区現況写真

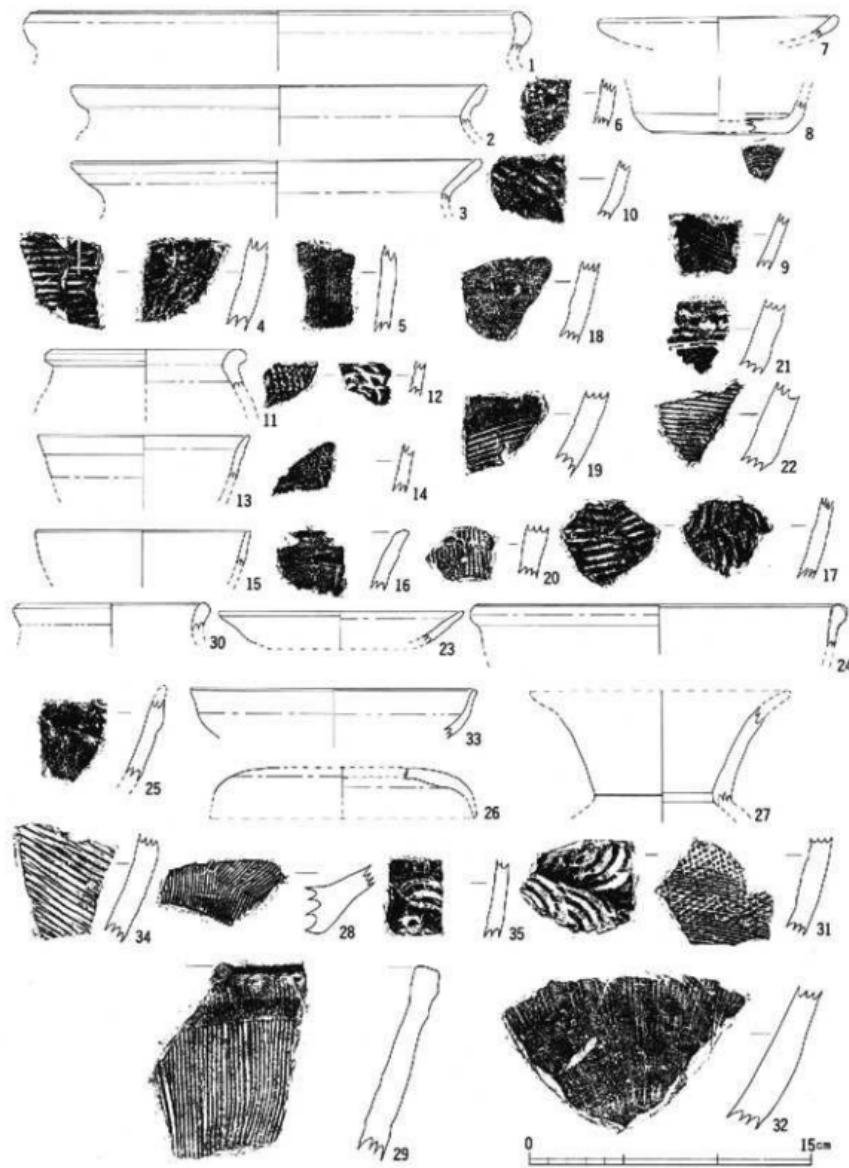


図版二 遺物実測図(1)



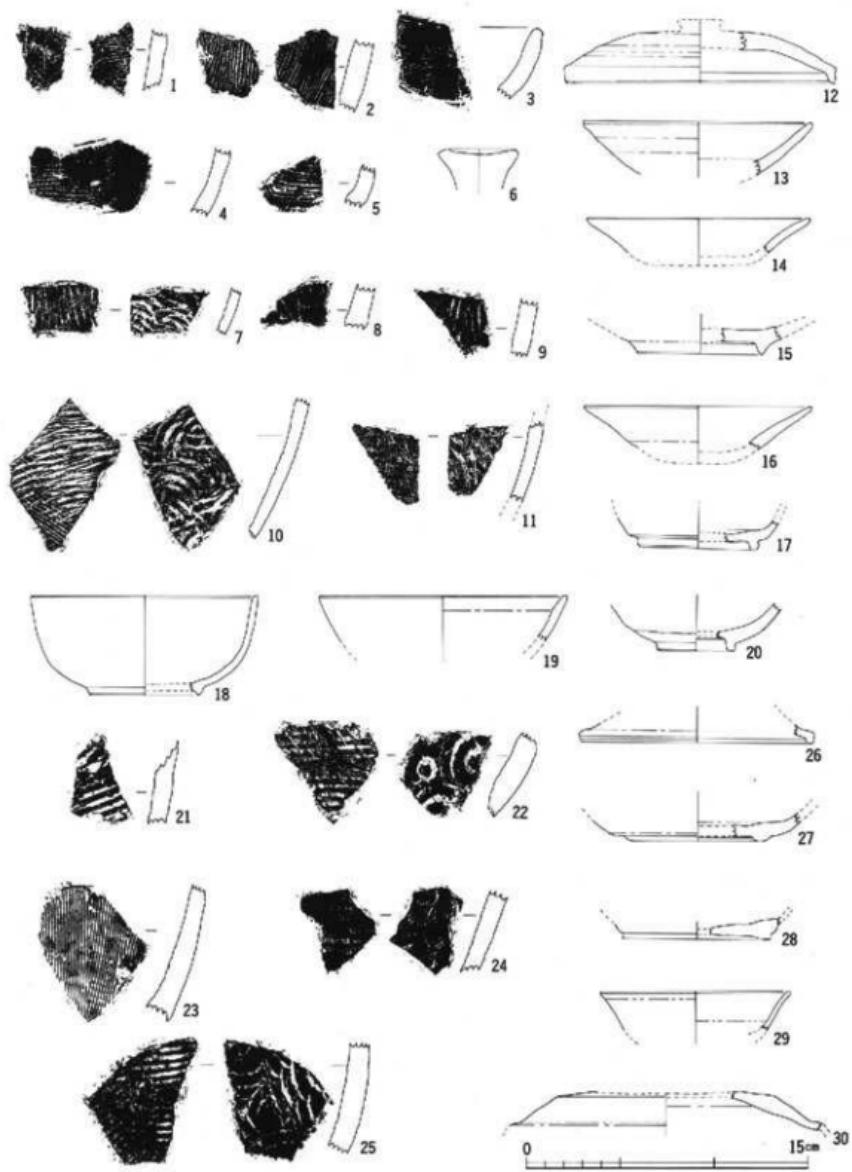
須恵器・土師器・陶磁器

(1~21, 23~32: 植田A遺跡, 22: 今2地区, 縮尺1/3, 図版10参照)



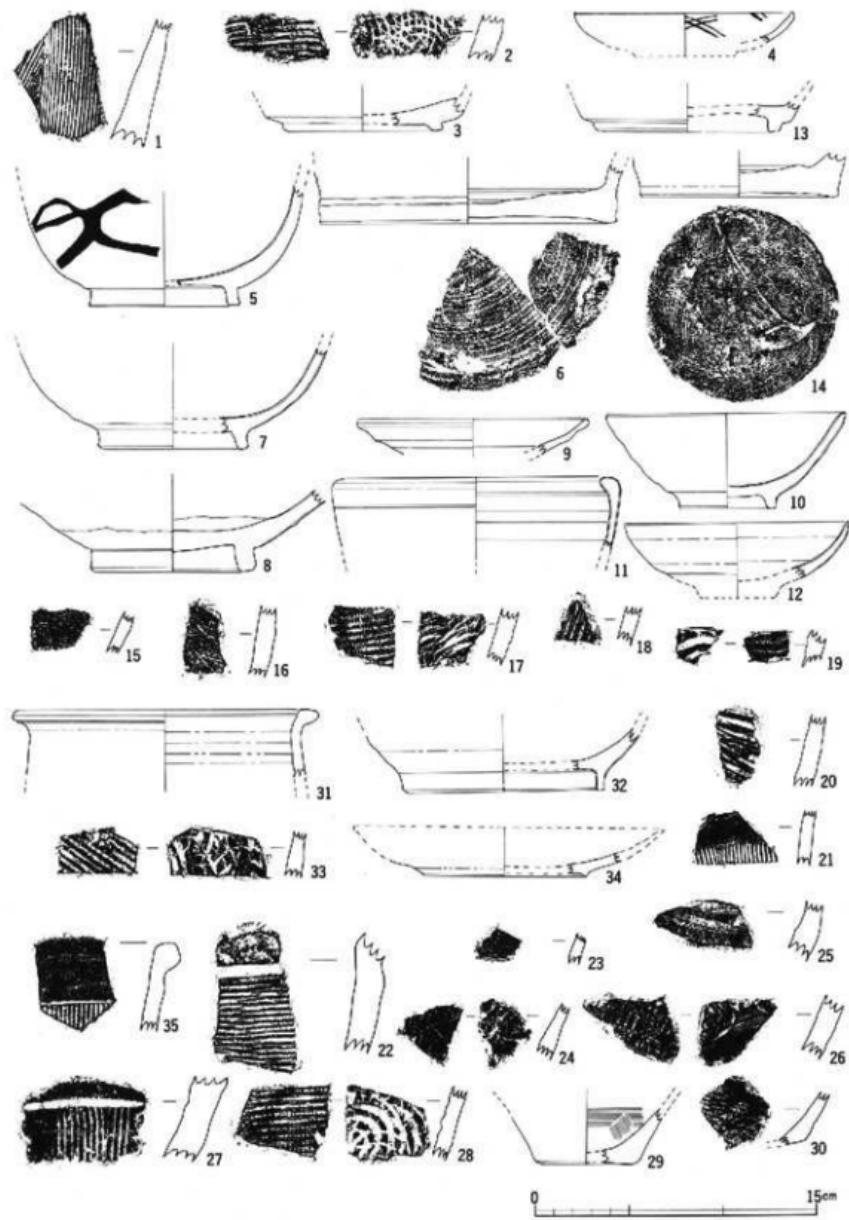
土師器・須恵器・陶器

(1~9: 種田A遺跡, 10~17: 種田B遺跡, 18~20・22・30~32: □-2地区, 21・23~29: ▲-2地区, 比尺1/3, 図版10参照)



土師器、須恵器、陶器

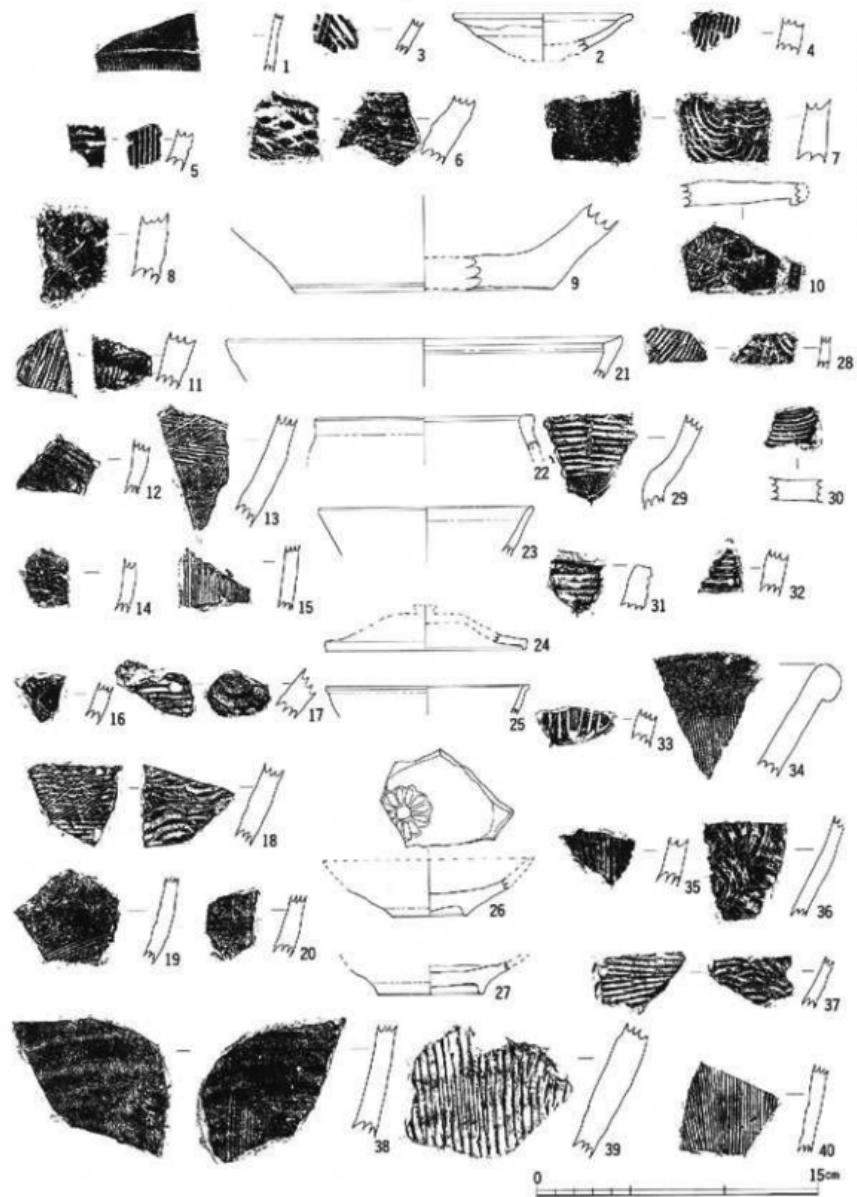
(1~5・7~20:八~2地区, 6:口~2地区, 21~30:种田C遺跡, 縮尺1/3, 図版11参照)



須恵器、陶器

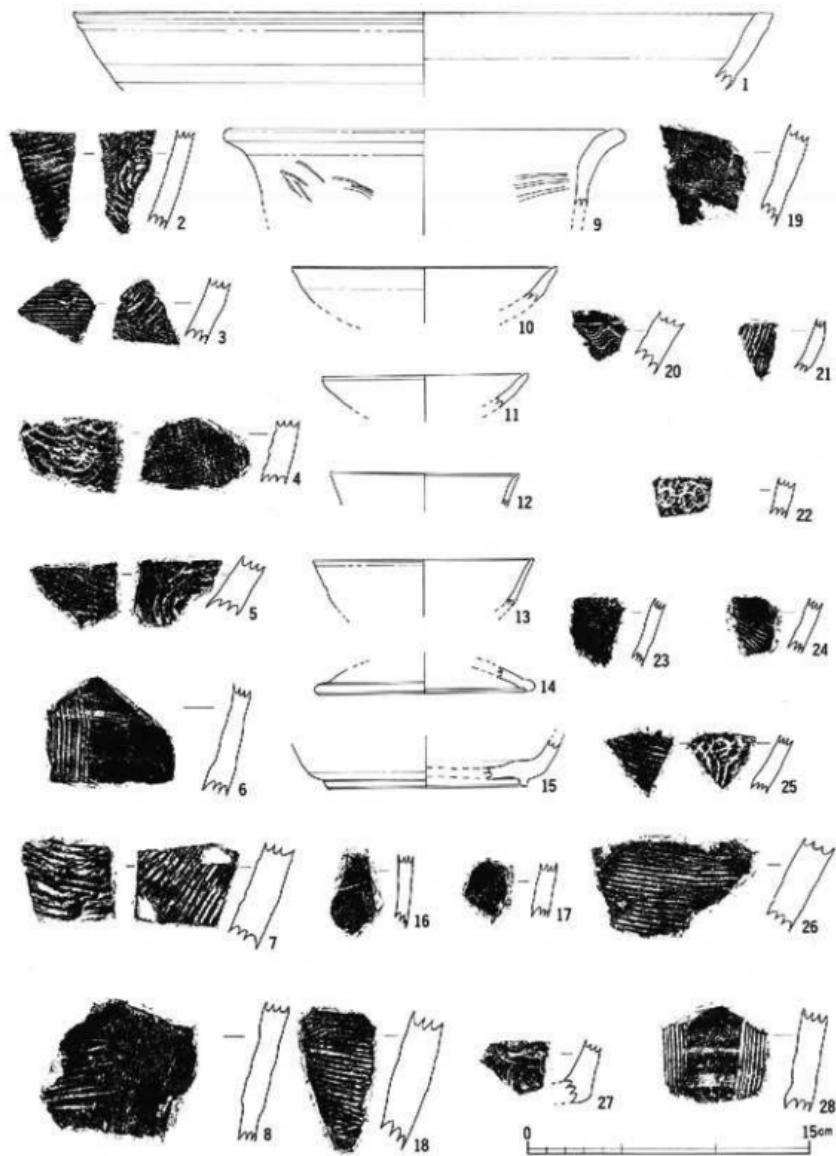
(29: 4-2地区, 1~4·13·16~20·22~26·28·30~34: 5~2地区, 5~12·14·15·27·35: 二地区, 縮尺1/3, 図版11·12参照)

図版六 遺物実測図(5)



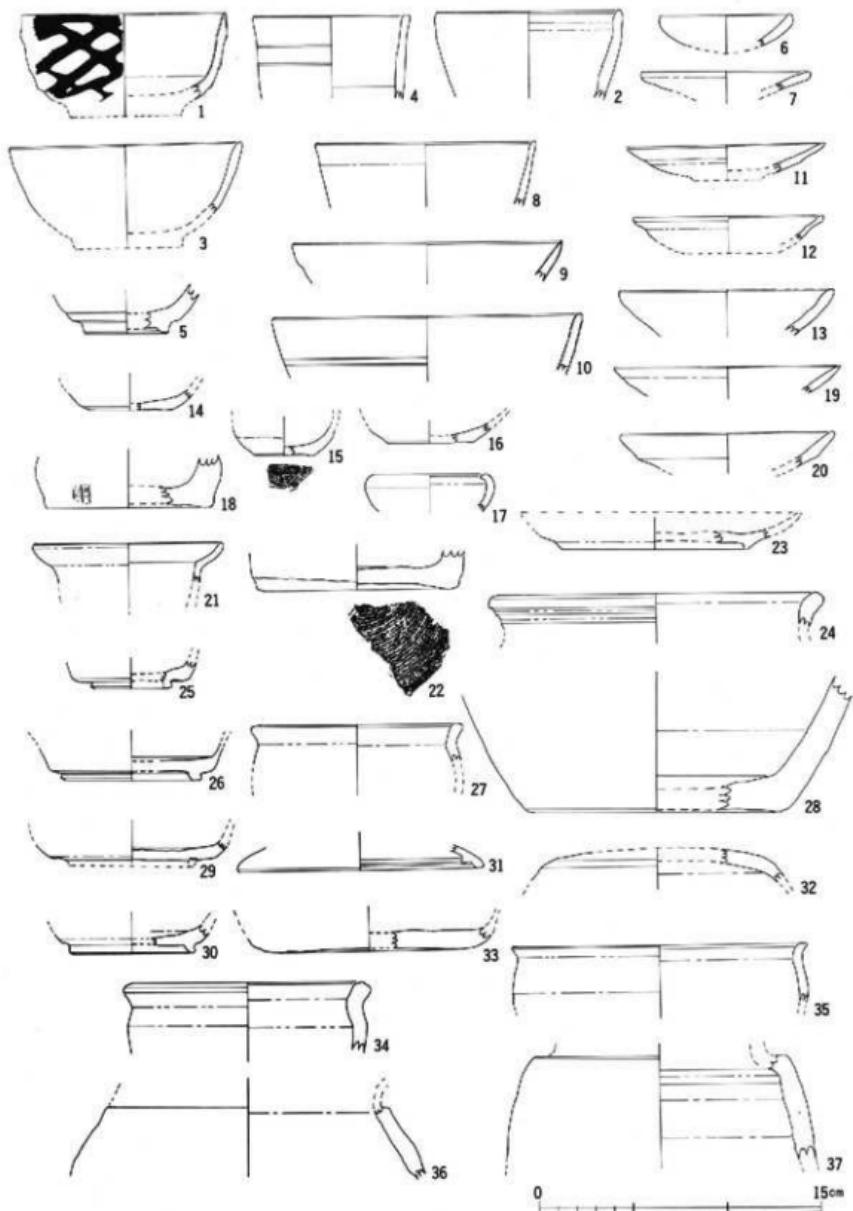
項墜器・珠・焼・陶器

(12・16・33・38: Ⅰ-1 地区, 5: Ⅰ-2 地区, 11・31・32・39: Ⅱ-1 地区, 17・20・27: Ⅱ-2 地区,
6・14・15・30: Ⅲ-1 地区, 1・4・7・8・35・36・40: Ⅲ-2 地区, 9・10・13・18・19・21・25・28・29・34・37: Ⅳ 地区,
縮尺1/3, 図版12参照)



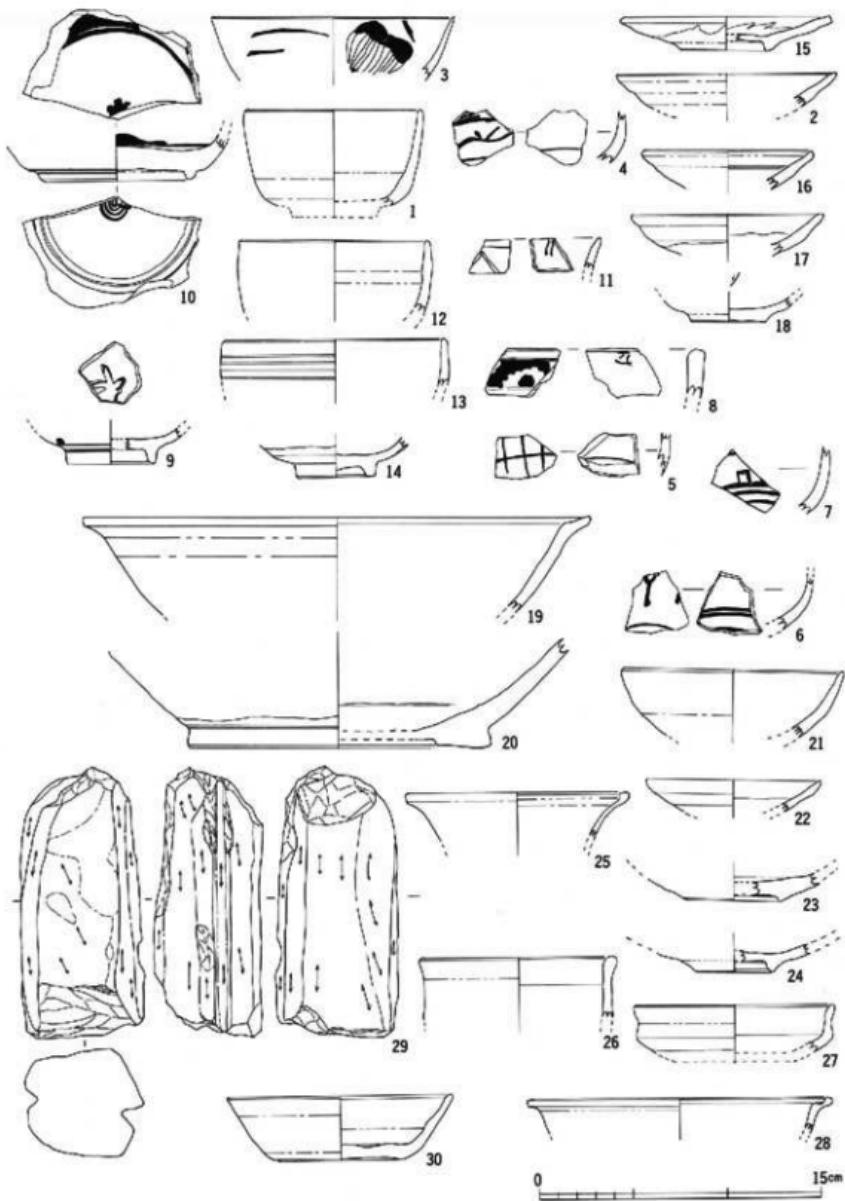
須恵器・珠洲焼・陶器
(1:イ-1, 2~28:ハ-2, 比尺1/3, 図版13参照)

図版八 遺物実測図(7)



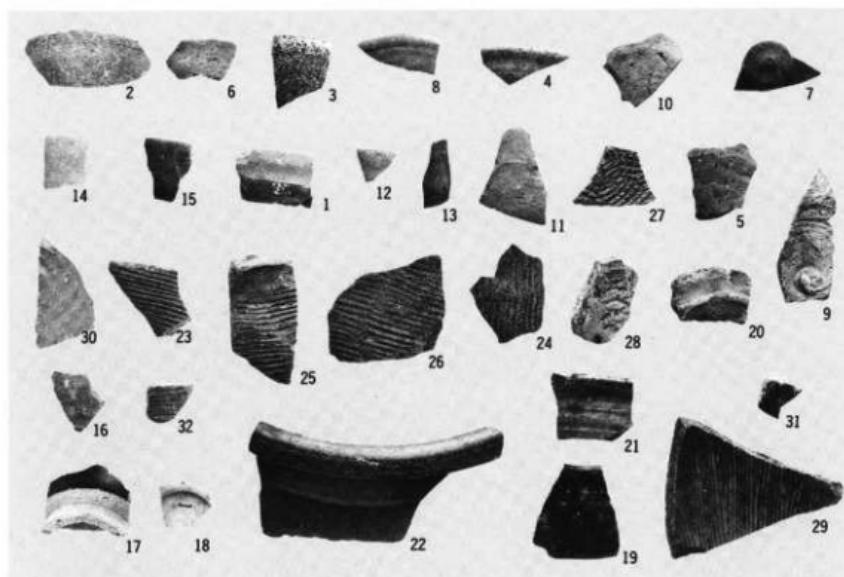
土師器・瓦器・須恵器・陶器

(10-16-24: Ⅰ-1 地区, 6-19: Ⅰ-2 地区, 3-12-14: Ⅱ-2 地区, 8-9-15-20-23-25: Ⅲ-1 地区, 1-2-4-7-11-17-21-22-26-29-37: Ⅲ-2 地区, 5-13-18-27-28: 二地区, 縦尺1/3, 図版13参照)

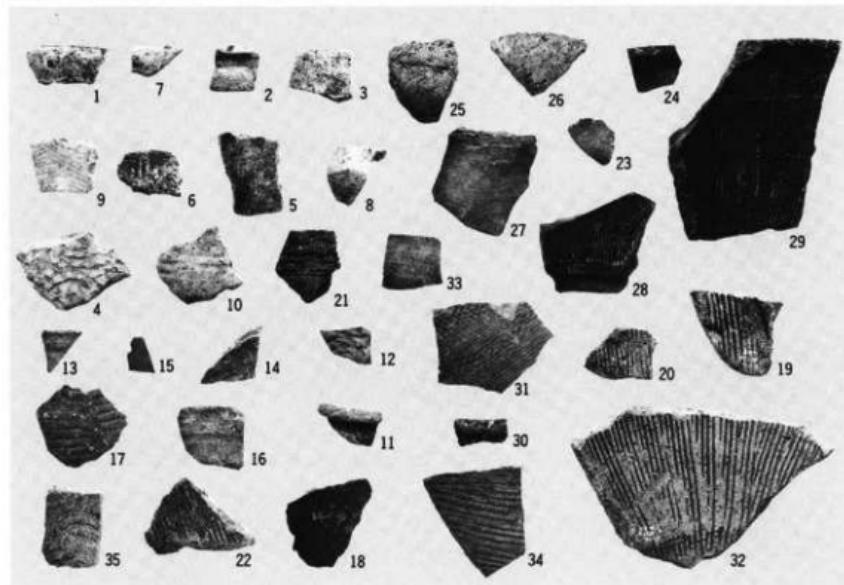


須恵器、石器、陶磁器

(17:イ-2地区, 14:ロ-1地区, 13・15・19:ロ- 地区, 1~3・10~12・18:ハ-1地区, 4・5・7~9・21・22・24・25・28:ハ-2地区, 6・16・20・23・26・27:ニ地区, 29・30:ロ-2地区にて寄託を受ける, 拡尺1/3, 図版14参照)



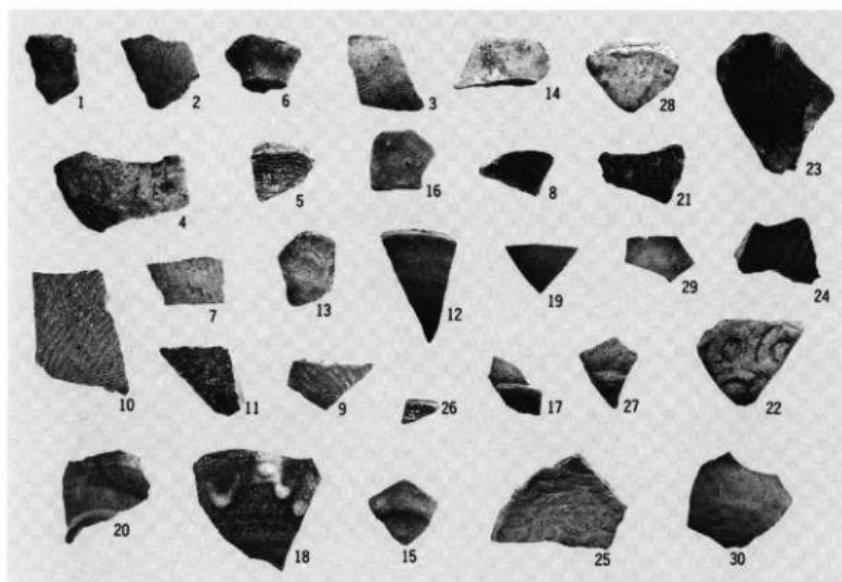
(1)



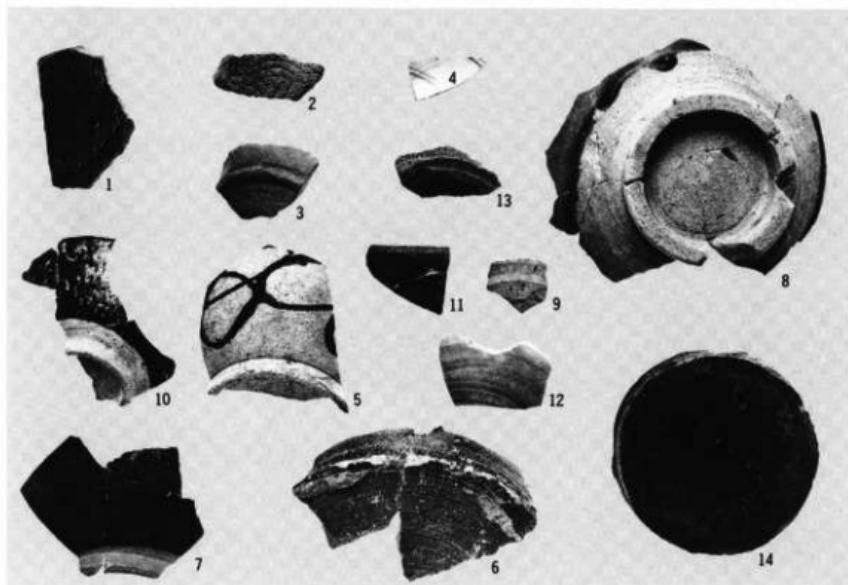
(2)

土師器、須恵器、陶磁器（図版2・3参照）

(3)



(4)

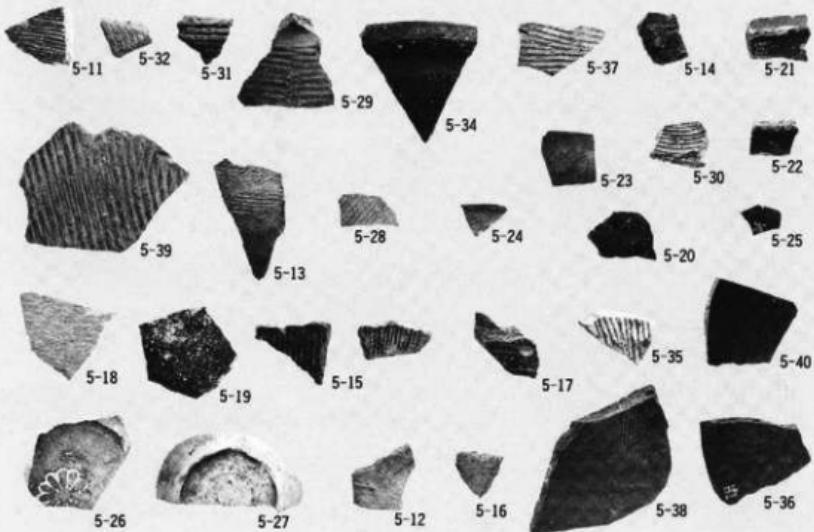


土師器、須恵器、陶磁器（図版4・5参照）



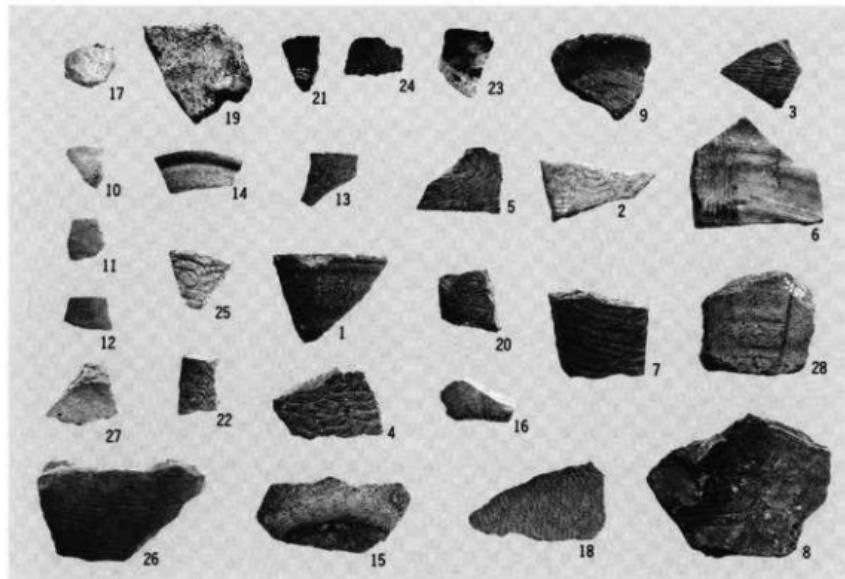
(4)

(5)

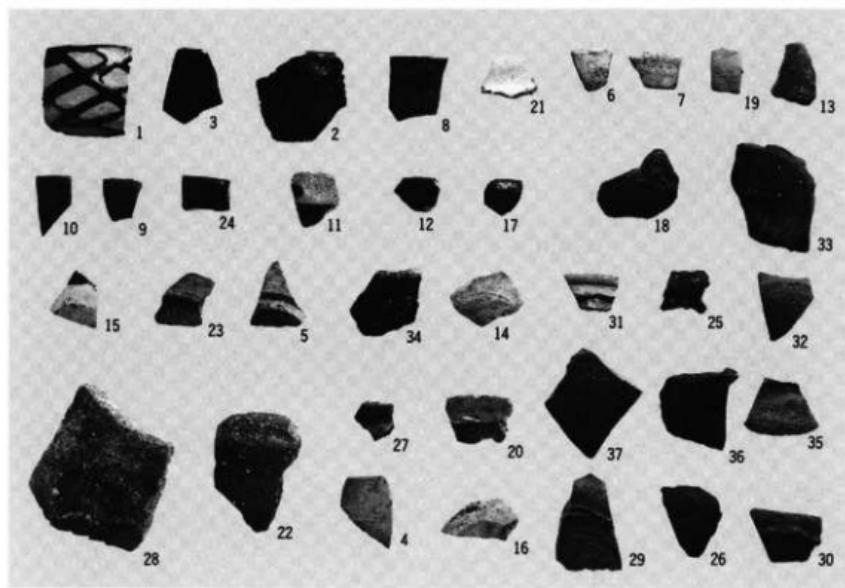


(5)

須恵器、陶器（図版5・6参照）

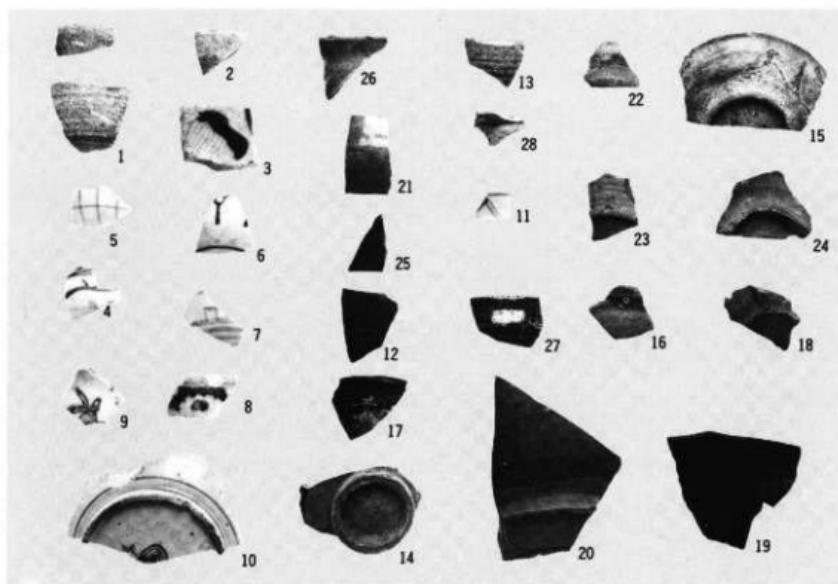


(6)

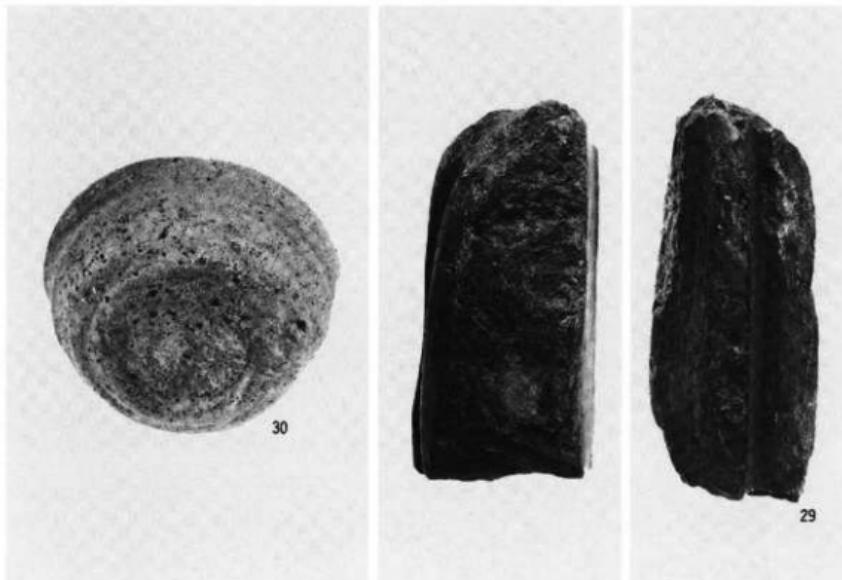


(7)

土師器、陶器 (図版 7・8 参照)

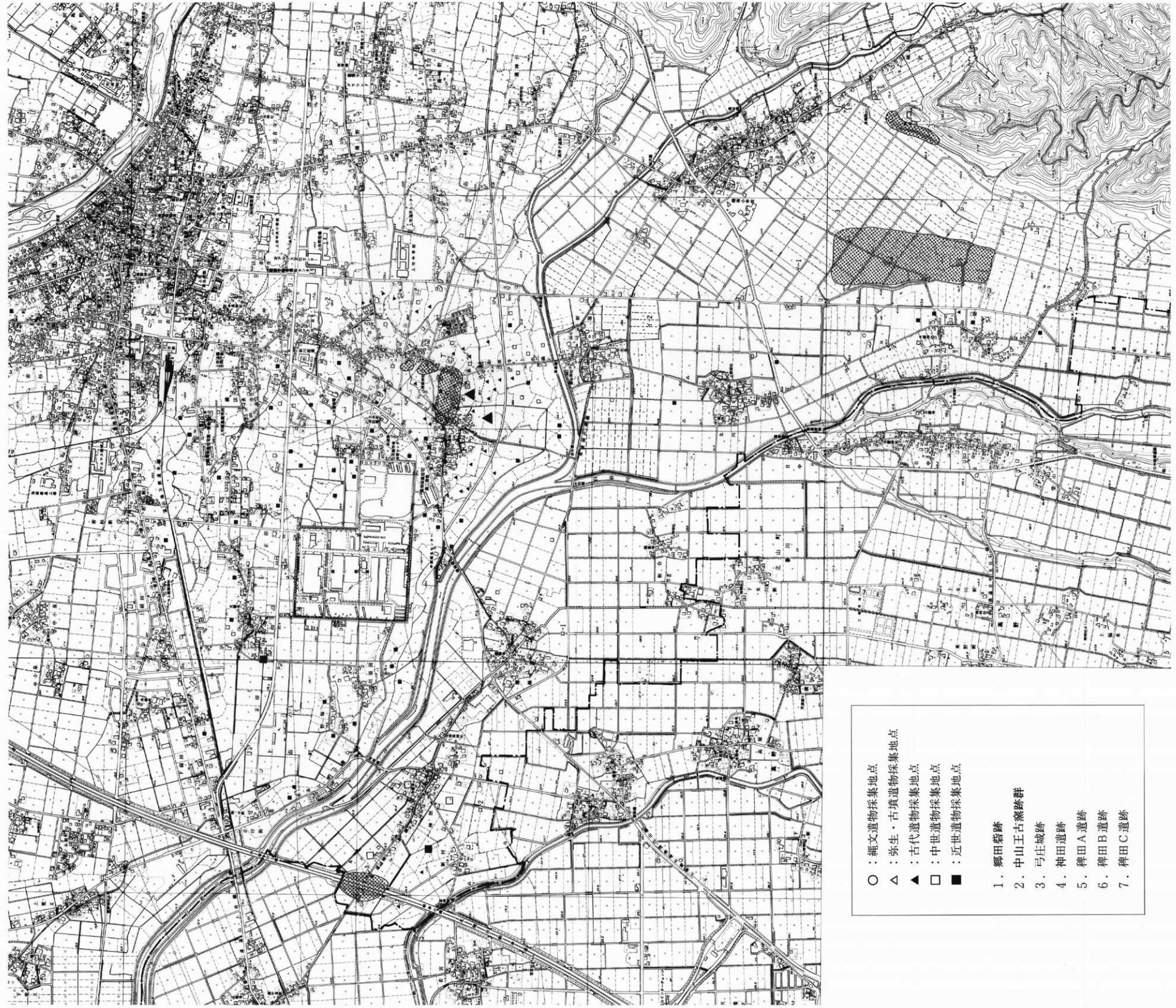


(8)



(8)

須恵器、石器、陶磁器（図版9参照）



1992年3月25日 印刷

1992年3月31日 発行

上市町埋蔵文化財分布調査報告Ⅳ

編集 上市町教育委員会

印刷 フルタエフ

